

## 回 答 小浜先生への回答

シェルドン・ウィリアムズ版は『ペリピュセオン』の第一次資料としての資格を失ったが、しかしこの版に基づいた従来のエリウゲナ研究の成果のすべてが水泡に帰してしまっただけではない。この版はエリウゲナ思想の大まかな理解にはほぼ支障がないだろう。ただ、例えばこの版にある *materia intelligibilis* をめぐって議論があったが、この語がエリウゲナによる書き込みではなかったことがジョノー版で明らかになり、それを問題とすることは当たらないということになった。

エリウゲナと偽ディオニュシオスとの関係についての精緻な研究はこれからの課題であろう。

エリウゲナに対する汎神論の嫌疑や断罪は断章取義の解釈や異端者が『ペリピュセオン』を支持したことによるものであった。現代ではエリウゲナを汎神論者と見る研究者はいないだろう。

ヘーゲルはエリウゲナを絶賛したし、両者には大いに似通うものがあるが、現在の私は具体的に論じる準備はできていない。西田とエリウゲナの関係についてはエリウゲナのラテン語原文を読み解いた上で論究されたことはこれまでなかった。私は両者の関係について若干論じたことがあるが甚だ未熟なもので、これも今後の課題としたい。

---

## 回 答 八巻先生への回答

- (1) エリウゲナの加筆、削除、訂正は主に自らの主張の明確化・精確化のためであったので、内容的な変化のほとんどはその範囲に留まると思うが、ジョノー版の出現で思想の変化発展についての新しい研究が今後期待される。
- (2) エリウゲナの写本はエリウゲナに縁故のあるフランス各地に多いが、特に二次写本以降の写本はドイツ、イギリス、アイルランドなど故地以外にも多く伝存する。異端問題については小浜先生への回答を参照されたい。

- (3) エリウゲナは9世紀には広く読まれ、ラン、オセール、コルビー、ザンクト＝ガレンを中心に影響を与えた。10世紀には『ペリピュセオン』はカテゴリーを弁証法的に論じた書と受け取られていたようだ。11世紀には彼の影響はあまりないようだ。アンセルムスの思想や概念にはエリウゲナとの類似点がかかなりあるが、影響関係は今のところ実証しがたい。彼は12世紀にはシャルトル学派やサン＝ヴィクトル学派に知られ、サン＝ドニのシュジェールは聖堂建設にエリウゲナの思想を利用した。これに関してはパノフスキーの研究が知られている。12世紀は『ペリピュセオン』の多くの写本が作られた時期でもあった。ロバート・グロステストがエリウゲナから影響を受けたほか、マイスター・エックハルトとクザーヌスはエリウゲナの後継者の側面がある。ついでに言えば、ドイツ観念論の哲学者たちは彼を「西方のプロクロス」とか「思弁哲学の父」と讃えた。また、西田幾多郎は彼から深い示唆を得たし、京都学派にはエウリゲナ哲学に深い共感を示した人々がいる。